愛 媛 県

果　試 ニュース

第17号　　平成14年８月

被害果

幼虫

ミカンキイロアザミウマの成虫

冬期の温暖な気象等により、平成６年度から続いている温州みかんの隔年結果が、今年は緩和されると期待していた。確かに裏年ながら着花量は比較的多かったのであるが、生理落果期に高温乾燥となったため、落果が多くなり、期待は帳消しになった。それどころか、梅雨期の降水量が少なく、８月上旬時点では石手川ダムの貯水量が平年より２０％以上も少ないなど、平成６年のような旱魃になる様相を呈しており、このまま行けば、一層隔年結果が助長される恐れすらある。

それにしても、本県で温州ミカン園のマルチ面積を拡大しようと気運が盛り上がった年に限って、夏秋期に降雨が少ないなど、マルチの価値が出なくなることが過去２回ほどあったが、今年もそうなるのであろうか。２度あることは３度あるとよく言われるが、こうなったら、お天道様のいたずらとしか考えようがない。

昨年のみかんの販売価格不振から、今年から新たにマルチ栽培を取り入れたり、面積を拡大した人は多い。せっかく被覆に多大な労力と資金を投入したのであるから、高糖適酸でじょうのう膜の薄い最高級品質みかんを生産し、有利販売して利潤を追求しなければならない。そのためには、ただマルチするだけでは不十分であり、常時、樹を観察し、過度の乾燥状態になる前に潅水を行う必要がある。

マルチ栽培は愛媛果試が開発した技術であり、現在は九州の産地で普及しているが、愛媛版マルチ栽培技術により、愛媛ブランドを維持発展させたいものである。

場　長　別府英治